

編集後記

創価教育の先師・牧口常三郎先生と戸田城聖先生の、太平洋戦時下での殉難から満70年を迎える本年、中島岳志先生（北海道大学大学院准教授）、有本昌弘先生（東北大学大学院教授）、森齊丈先生（武蔵大学非常勤講師）という、学術界の最先端で御活躍されている方々にも論考をお寄せいただき、ここに6号目（前誌から通算12号目）となる本誌を刊行する運びとなった。大変にお忙しいなか、研究所講演会・研究会のため遠路八王子の地にまで足をお運び下さり、さらにその原稿の掲載をご快諾いただいた先生方に、心より御礼申し上げたい。

*

講演の部には5本を収録した。一つ目は、中島岳志「牧口常三郎『人生地理学』とトポスの問題」である（2012年11月26日の創価教育研究所記念講演会における講演）。現代社会におけるトポスの喪失と再構築という観点から『人生地理学』を解釈する試みであり、トポスの概念と牧口の郷土の概念の重ね合わせが試みられている。二つ目は、有本昌弘「創価教育学への今日的問いかけ——SBCDの教育哲学をカバーし、なぜリードしうるのか？」である（2011年11月14日の創価教育研究所記念講演会における講演）。School-based Curriculum Development (SBCD) と牧口教育学との関係を追究し、現代における創価教育学の可能性を考察している。

三つ目に、神立孝一「創価学園・創価大学と創立者（第3回）」は、創価学園・創価大学の草創期について、生徒・学生の眼から見た証言資料を提供している（2012年8月24日の第40回夏季大学講座における講義）。同じく証言資料となるのが、大倉鎮信「創立者と日中民間交流の淵源——中国研究会の設立と呉月娥先生との交流」である（2012年6月8日の創価教育研究所講演会における講演）。創立者の「日中提言」および日中民間外交に関する、当時の学生視点の記録である。また、三好健洋「創立者と共に 創立者の精神で——1973年第二回 滝山祭を中心に」（2011年7月1日の創価教育研究所講演会における講演）では、大学草創期の学生と創立者との深く密接な交流を証言している。

研究論文としては2本収録することができた。一つは、森齊丈「リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギーの思想と源流」である。現在の欧州通貨危機などヨーロッパに山積する問題の基底には、政治理念なき経済統合の推進があると見て、この解決の糸口を、カレルギーの掲げた「友愛思想」「実践的理想主義」の理念に探ろうとした論考である。もう一つは、富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(5)」である。創価女子学園の卒業生が、学園生活の経験を通してその内面をどのように形成したか、また卒業生が当時の経験を現在どう意味づけているかについて、インタビュー調査を基に考察している。

報告も2本収録している。一つは、神立孝一“Daisaku Ikeda and Soka Education”である。日中国交正常化40周年を記念した第7回池田大作思想国際学術シンポジウム（上海師範大学、2012年10月27-28日）での発表記録である。もう一つは、高橋

強「中国における「池田思想」研究の動向 (9)」である。2012年に開催された中国における池田思想研究の学術シンポジウムの概要や池田大作研究機関の新設について紹介している。

資料紹介には、斎藤正二『『人生地理学』補注』補遺(第2回)を収録することができた。前号に引き続いて今号では、『人生地理学』の「第三篇 地球を舞台としての人類生活現象／第二十三章 社会」のための二つの補注がその内容となっている。牧口研究の第一人者として知られた著者の貴重な遺稿を、今後も本誌で紹介していく予定である。遺稿掲載をお許しくくださった著者のご遺族に、重ねて心奥より感謝を申し上げます。

*

森氏の論稿からは、ヨーロッパの現実問題からカレルギーの理念が浮かび上がった。理念と現実の間にはいつも裂け目がある。この隙間を少しでも埋めていくための前提は、理念を手放さないことである。これを忘れるとき、現実は何でもありの世界となるのだから。他方、理念は雲をつかむような言葉遊びになることしばしばである。現実問題との対峙を忘れるとき、理念は単なる遊び道具のための消費財となる。

中島氏は牧口常三郎の『人生地理学』を引用しつつ、「足元を見つめよ。その足元を追求することによって、つまり、このトポスを追求することによって、私たちはマクロコスモスを手に入れることができる」と語った。理念は現実の問題圏を欠いてはならないということである。牧口の理念はトポスの解体という現実問題を契機に、単なる言葉遊びを超えた次元から、わたしたちの知性の在り様に対して反省をうながしつづける。

本誌もまた、理念と現実との緊張関係を保ちつつ、過去と現在との内的対話をとおして未来を志向する姿勢を、己に課していかなばならないと自戒するものである。憲法改正論議や原発存廃論議などの政治問題から、いじめや児童虐待や体罰事件などの教育問題に至るまで、わたしたちが向き合うべき現実の課題の何と多く、何と困難なことか。しかし、戦前の軍国主義思潮のなかにあって真の教育とは何かを問いつづけ、ついには国家権力によって弾圧された先師たちの闘争を思うとき、多難を理由にひるむことは許されないであろう。創価教育の研究は、まさに殉難満70周年の今、わたしたちが何を考え、いかなる言葉を綴るのかという《現実との格闘》なしには無に等しい。そのことを夢寐にも忘れず、研究に精進して参りたい。今後とも、読者からの御批正を乞う次第である。

最後に、今号からお世話になることとなった株式会社精興社に深く御礼を申し上げます。印刷業界の老舗として知られる同社は本年で創業満100周年を迎えるが、本学としてはとりわけ『創価教育学体系』初版(1930年)の印刷元として馴染みがある。浅からぬ縁を感じてやまない。

2013年3月16日
(T. I. & S. U.)